

# 図書館の本だな

～3・4年生 おすすめの本のリスト 2022～

## 願いのかなうまがり角

岡田 淳 作 偕成社 913-オ

おじいちゃんは、郵便受けから新聞をとってくる手つだいを夏休みにしていたとぼくにいった。「それやったら、ぼくでもできる」と笑うと、おじいちゃんは新聞をとってくるのはちょっとした冒険だったとはなしてくれた。大きな家だから、庭には森もあれば川もある。森をあるいていると鬼がでて、墓場ではドラキュラに声をかけられるという。

## オンボロやしきの人形たち

フランス・ホジソン・バーネット 作 尾崎 愛子 訳

徳間書店 933-バ

シンシアという女の子の子どもベヤのすみっこに「オンボロやしき」という古い人形の家がありました。そこには人形一家がすんでおり、みんなとても明るい性格で、たいへんなことがあってもどんなことでも楽しめます。ところがある日、人形一家のヘンテコちゃんが、シンシアの乳母がオンボロやしきをもやしてしまおうというのを聞いてしまいました。

## 小さい魔女

オトフリート・プロイスラー 作 大塚 勇三 訳

学研教育出版 943-プ

そそっかしくて負けずぎらいの小さい魔女は百二十七さい。でも魔女たちの中では魔法も修行中のひよっこです。年に一度の魔女のおどりにでるために、大きい魔女たちに一人前にあつかってらおうと修行にはげみます。口のきけるカラスと一緒に、大きい魔女たちのような「いい魔女」になるためにであった人や動物に魔法をかけていきます。

## 小さなバイキングビッケ

ルーネル・ヨンソン 作 石渡 利康 訳 評論社 949-ヨ

バイキングとよばれる人たちが、千年ほど前にスウェーデンやノルウェーの海岸に住んでいました。ビッケのお父さんはバイキングの族長で、偉大な戦士です。ところが、ビッケは戦いをこのまず、頭を働かせて危険をさけるのがじょうずです。ある日、ビッケはお父さんと「石はこび」の競争に勝ったごほうびに、バイキング遠征につれていってもらふことになりました。

# ピトウスの動物園

サバスティア・スリバス 著 宇野 和美 訳 あすなろ書房 959-ス

スペインのなかよし<sup>ろくにんぐみ</sup>六人組のひとり、ピトウスが重い<sup>おも</sup>病気<sup>びょうき</sup>になってしまいました。その病<sup>びょう</sup>気<sup>き</sup>は、スウェーデンに行<sup>い</sup>かなければなおすことができません。なかまの五人<sup>ごにん</sup>はピトウスの病<sup>びょう</sup>気<sup>き</sup>をなおすお金<sup>かね</sup>を集めるために、一日<sup>いちにち</sup>だけの動物園<sup>どうぶつえん</sup>をつくることを思いつきます。町<sup>まち</sup>の子ども<sup>こ</sup>たちやおとなたちも、力<sup>ちから</sup>をあわせて動物園<sup>どうぶつえん</sup>づくりを手伝<sup>てつだ</sup>います。

# ほしになつたりゅうのきば

君島 久子 再話 赤羽 末吉 画 福音館書店 E-ア

むかし、あるむらに大きな石<sup>おおいし</sup>がおちてきてぱっとわれると、中<sup>なか</sup>にはおとこの子<sup>こ</sup>がいました。その子はサン（えいゆう）となづけられ、やがてりっぱなわかものになります。ある日<sup>ひ</sup>、南山<sup>なんざん</sup>のりゅうと北海<sup>ほっかい</sup>のりゅうがけんかをはじめ、天<sup>てん</sup>がやぶれてしまいます。その天<sup>てん</sup>のさけめは、ちようどサンのむらの上<sup>うへ</sup>でした。サンは天<sup>てん</sup>のさけめをつくろうため、なんでもしっているライロ<sup>らいろん</sup>山のろう人<sup>じん</sup>をたずねます。

# 富士山のまりも

亀田 良成 文 福音館書店 474-カ

まりもは丸<sup>まる</sup>い形<sup>かたち</sup>をした藻<sup>も</sup>のかたまりです。50年<sup>ねんいじょうまえ</sup>以上前<sup>しやうがっこう</sup>、わたしが小学<sup>ねんせい</sup>校<sup>3</sup>年生<sup>だ</sup>ったころ、富士山<sup>ふじざん</sup>のふもとにある山<sup>やま</sup>中<sup>なか</sup>湖<sup>こ</sup>へと出かけ、そこで自由<sup>じゆうけんきゆう</sup>研究<sup>ちい</sup>のため小<sup>い</sup>さなまりもを家<sup>いえ</sup>に持<sup>も</sup>ち帰<sup>かえ</sup>りました。現在<sup>げんざい</sup>山<sup>やま</sup>中<sup>なか</sup>湖<sup>こ</sup>のまりもは糸<sup>いと</sup>状<sup>じやう</sup>の藻<sup>も</sup>のみで、絶滅<sup>ぜつめつ</sup>に近い<sup>ちか</sup>状<sup>じやう</sup>況<sup>きやう</sup>になっています。ところが、当時<sup>とうじ</sup>持<sup>も</sup>ち帰<sup>かえ</sup>った丸<sup>まる</sup>いまりもは、今<sup>いま</sup>でもわたしの家<sup>いえ</sup>の庭<sup>にわ</sup>で元<sup>げん</sup>氣<sup>き</sup>に増<sup>ふ</sup>えつづけていたのです。

# 家をせおって歩く

村上 慧 作 福音館書店 702-ム

私<sup>わたし</sup>は発泡<sup>はっほう</sup>スチロールの家<sup>いえ</sup>を自分<sup>じぶん</sup>で作<sup>つく</sup>り、その家<sup>いえ</sup>をせおって歩<sup>ある</sup>き住<sup>す</sup>むというこをしています。家<sup>いえ</sup>にはお風呂<sup>ふろ</sup>もトイレもなく、手<sup>て</sup>ぶらで知<sup>し</sup>らない町<sup>まち</sup>を探<sup>さが</sup>して歩<sup>ある</sup>くのです。寝<sup>ね</sup>るときはキャン<sup>かん</sup>プ用<sup>よう</sup>のマットと寝袋<sup>ねぶくろ</sup>を使<sup>つか</sup>い、いつも虫<sup>むし</sup>たちとうまく一<sup>いっ</sup>緒<sup>しょ</sup>に寝<sup>ね</sup>る方法<sup>ほうほう</sup>を探<sup>さが</sup>ります。住<sup>す</sup>む場所<sup>ばしよ</sup>は変<sup>か</sup>えることができ、新<sup>あたら</sup>しい家<sup>いえ</sup>を作<sup>つく</sup>ることもできます。いつもと同じ<sup>おなじ</sup>町<sup>まち</sup>が全<sup>ぜん</sup>然<sup>ぜん</sup>違<sup>ちが</sup>って見<sup>み</sup>え、私<sup>わたし</sup>たちはそうやって世<sup>せ</sup>界<sup>かい</sup>を変<sup>か</sup>えていくことができるのです。

# 沖釣り漁師のバート・ダウじいさん

ロバート・マックロスキー さく わたなべ しげお やく  
童話館出版 E-マ

バートじいさんはある朝、潮まかせという名の舟でたらをつろうと沖に出ました。釣づなにどしりとおもい引きをかんじ、力いっぱいひっぱると、くじらが釣りあがりました。そこへ突風がふきはじめ、バートじいさんはくじらに、突風がおさまるまでわしらをのみこんでほしいと相談します。

# 地球パラダイス

工藤 直子 詩 石井 聖岳 絵 偕成社 E-イ

「綿雲に 花の香りをふくませて 太陽が 空を みがいている コシコシ コシコシ」  
太陽や風、花や草や虫が、自然のなかでのんびりくらしています。季節のながれにそってまとめられた詩の絵本です。